

松下国際財団 研究助成 研究報告

【氏名】木村 奈津子

【所属】(助成決定時) 一橋大学大学院社会学研究科

【研究題目】

希少動物の域外保全に関する人類学的研究

—絶滅危惧種ユキヒョウの種の保存プロジェクトと血統登録を事例に—

【研究の目的】

生物多様性への意識の高まりとともに「希少動物の保護」が普遍的な倫理として定着しつつある一方、捕鯨論争に代表されるような「動物の価値」の違いは、希少動物保護をめぐる人間同士の様々な対立を生み出している。そこで本研究は野生動物をめぐる多様な価値観の中でも特に保護の立場に着目し、中央アジア高山地帯に生息する絶滅危惧種ユキヒョウを対象に、「希少動物」という動物の価値のあり方を保護の歴史、実践、言説、科学的思考に迫ることで明らかにする。グローバルに展開する保護の包括的な理解を目指す研究の一環として、本研究では絶滅危惧種の生息地外における人工的な飼育・繁殖という域外保全を取り上げ、科学者と動物園が協力し合う「種の保存プロジェクト」と「血統登録」システムの実践から、保護を可能にする人間のネットワーク、そこに流通する科学的知識と実践、保護の思想の広まりの一端を捉えることを目指す。

【研究の内容・方法】

動物園を中心とした域外保全に関する文献調査ならびに現地調査を国内外で実施した。動物園が自然保護を自らの社会的機能と位置づけ、野生動物の保全へ向かった流れをたどり、動物園にとっての希少動物の位置づけを考察した。特に国際動物園年鑑の創刊(1960年)以降の特集や内容の変遷から、世界中の動物園が協力し合い保全に取り組む姿勢を示していく流れを追った。また当初掲載されていた動物商リストが無くなった点、ブリーディングローンなど売買以外の方法での動物の入手が主流になる点など、希少動物を所有する動物園が動物を商品として売買しないという姿勢を捉えることができた。さらに動物園の現場の意識を探るため、国内の動物園園長、飼育員、動物園関係のNPO職員、動物園ファンなどの来園者らにインタビューを行った。

また域外保全と域内保全の協力関係およびユキヒョウ保護の国際的ネットワークの全容、ユキヒョウ保護の歴史的な流れを把握するため、ユキヒョウ保護の中核組織 Snow Leopard Trust(SLT)の米国シアトル本部で2010年3月に3週間のフィールドワークを行った。資料やインタビュー、組織でのボランティア活動を通し、SLT設立から国際的な保護運動の中心となるまでの組織の発展、生息地における中心的な保護プロジェクトを支えるファンドレイズ、他の組織や科学者との協力関係などを把握した。

さらに生息地外でのユキヒョウの効果的な繁殖のため、全世界で約500頭いる飼育下のユキヒョウの一括管理、一括繁殖計画を行う血統登録システムに関して国内外での調査を進めた。資料から国内動物園におけるユキヒョウ飼育数の変遷や血統管理の状況を捉え、実際のシステムの状況について国内の担当者へのインタビューを実施した。また2010年10月にスウェーデンの動物園に2週間滞在し、国際血統登録者へのインタビューを中心とした現地調査を行った。

【結論・考察】

希少動物の保護は、生息地での域内保全に焦点が当てられることが多い。しかし、ユキヒョウ保護の歴史的・地理的展開をたどると、SLTや国際ユキヒョウ会議が動物園関係者によって創設されるなど、動物園によるユキヒョウ飼育・維持が域内保全をも含めた保護へ発展していた。さらに現在も域内保全のための科学調査に必要なデータは動物園のユキヒョウから得られており、域内保全は飼育下のユキヒョウや域外保全に支えられている。また域外保全におけるユキヒョウの希少性は、血統管理や動物園間の動物の取引によって浮かび上がると同時に、野生の生息数、科学的な希少さといった域内保全の中で現れる希少性によって保証されている。つまり域内・域外保全のそれぞれの実践の絡み合いがユキヒョウの希少性という価値を生み出している。今後の課題として、科学者や現地住民、各国政府など異なるアクターの間での希少性という価値の生成・流通・受容／拒否に迫りながら、希少性と保護の論理についての考察を深めたい。